OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治期地方婦人会機関誌にみる社会活動 : 浪華婦人会編『婦人世界』（1901～1907）をめぐって
Author(s)	楫野, 政子
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 153-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治期地方婦人会機関誌にみる社会活動
――浪華婦人会編『婦人世界』(1901～1907)をめぐって――

楫　野　政　子

1．はじめに――先行研究と本稿の課題

本稿が検討の対象とする『婦人世界』は、1901年（明治34年）６月15日に、大阪の地で創刊された。実業之日本社刊『婦人世界』とはまったく別の雑誌であり、編集発行の主体は、当該期大阪の裕福な知識女性の組織、浪華婦人会である。本稿の目的は、慈善を志して結成された浪華婦人会が、その慈善事業をどのような意図のもとでどのように遂行していったかを、月刊の機関誌『婦人世界』を手がかりとして明らかにすることである。また、『婦人世界』はちょうど日露戦争の時期をまたいで発行されているので、当時の教養ある女性たちは日露戦争にどのように関わったかという点を明らかにするうえでも、さまざまな示唆を得られるのではないかと考えられる。

まずは先行研究について見ておくと、浪華婦人会編『婦人世界』を取り上げた文献はほとんどない。たとえば、長谷川時雨が「女性とヂャーナリズム」（『長谷川時雨全集』第４巻、日本文林社、1942年、初出は1931年）において主に婦人記者を論じた際に挙げた、明治から昭和初期にかけての婦人雑誌・新聞のなかには、実業之日本社刊『婦人世界』は含まれているが、浪華婦人会編『婦人世界』は見あたらない[1)]。

この傾向は現在に至るまで続いていて、実業之日本社刊『婦人世界』と混同されることもままあり、浪華婦人会編『婦人世界』はほとんど知られていない。

近代女性文化史研究会による『婦人雑誌の夜明け』（大空社、1989年）の第３期明治30年代においても、浪華婦人会編『婦人世界』は取り上げられていない。三鬼浩子による「近代婦人雑誌関係年表」（中嶌邦監修『日本の婦人雑誌』大空社、1994年）には、「明治34年６月から明治39年１月１日まで　発行・浪華婦人会（大阪）　編集・長沖はな　月刊」と記載されているものの、解説編での記述はない。また、浜崎廣著『女性誌の源流』（出版ニュース社、2004年）では、綜合誌系の雑誌として、「明治34年６月から明治39年２月、大阪は南区末吉橋通４丁目63番邸の《浪華婦人会》の機関誌。月刊。定価６銭。頁数は40頁前後」と簡単な解説があるのみである。

近年の紹介で最も詳細なのは、大谷渡によるものである（「厭戦と反戦」、早川紀代編『戦

争・暴力と女性２　軍国の女たち』吉川弘文館、2005年。大谷渡編『大阪の近代――大都市の息づかい』序章、東方出版、2013年）。しかしこれも、「新思想に目覚め」た石上露子ら大阪の女性像の構築に重きがおかれ、雑誌それ自体への論評は限定的である。

つまるところ、浪華婦人会編の『婦人世界』は、明星派歌人石上露子が青春時代の一時期に『婦女新聞』などと同様美文や雑文を投稿していたことから、あくまでも露子との関連で言及されるのみであって、露子研究の第一人者松村緑を含め、『婦人世界』という雑誌そのものに注目した論者はいまだいないといえる。これは、『婦人世界』が浪華婦人会という地方の婦人会の機関誌で発行部数も多くなかったこと、『婦人新報』を発行した「婦人矯風会」のような広範な組織を背後に持たなかったことなどが原因となって、人々の注意を引かなかったためであろう。加えて、現存する『婦人世界』が少数で、創刊号も未発見であった――創刊の時期も現存する号の記事により推測したものであった――ことが致命的であった。

筆者は、このたび、静岡県立大学附属図書館および石川武美記念図書館で、これまで未発見であった浪華婦人会編『婦人世界』を新たに発掘することができた。その結果、現時点で閲覧可能な浪華婦人会編『婦人世界』は、東大本、関大本、静岡県立大本、石川武美記念図書館本、筆者蔵本を入れて、１号（1901年６月15日）、２号、３号、４号、５号、６号、７号、８号、９号、10号、11号、12号、14号、15号、26号、29号、30号、32号、34号、35号、36号、38号、44号、48号、50号、51号、54号、55号、56号、57号、58号、59号、60号、61号、66号（1906年11月15日）の計35冊となった（下線部が新たに見つかった号。なお、８号、14号、15号、48号、50号、51号、54号～56号、66号は関西大学蔵、30号、36号、38号は東京大学明治新聞雑誌文庫蔵、１～12号、29号、44号、56～58号は石川武美記念図書館蔵、26号、44号は静岡県立大学岡村文庫蔵、32号、34～36号、58～61号は筆者蔵）。66号以降1907年12月まで月刊で刊行されたとすると[2)]、『婦人世界』は総計79冊刊行されたことになり、いまだその半分以上も発見されていないことになるが、創刊号が発見されたこと、創刊号～第15号をはじめある程度まとまったかたちで分析できる部分が増えたことを踏まえ、浪華婦人会編『婦人世界』の研究の中間報告を行うこととした。

1899年、新聞紙条例第６条第１項が改正されて、「男子ニ非ザレバ発行人編集人印刷人トナルコトヲ得ズ」の「男子」がはずされ、女性の編集・発行が認められたが、「近代婦人雑誌関係年表」にある1901年創刊の雑誌12誌のうち、女性編集者名による雑誌は『婦人世界』のみであった。このように、『婦人世界』は、女性だけで編集・発行されたこと[3)]、1907年の終刊まで毎月１回の発行を６年以上続けたことなど、この時期の婦人会機関誌としては意義ある雑誌と考えられる。本稿では、これまでほとんど取り上げられてきてい

ない浪華婦人会と『婦人世界』について、基本的な情報を提供するとともに（第２節）、日露戦争期の社会活動に注目する視点から分析を試みる（第３節、第４節）。そのうえで、浪華婦人会と『婦人世界』の分析から見えてくるものについて考えることにより（第５節）、今後の研究の基礎を築きたい。

２．浪華婦人会編『婦人世界』の発刊

（１）『婦人世界』発刊の目的

1901年（明治34年）６月15日、『婦人世界』は創刊号を発行した。同年６月19日内務省の認可を受け、７月10日第三種郵便の認可を得ている。毎月１回、15日発行とある。

創刊号巻頭には赤紙で「婦人世界発刊の辞」が掲載されており、雑誌発行の目的が語られている。それによると、「趣意は世間諸種の婦人雑誌と異にして」、婦人間で交情を深めながら、見聞を広め知識を交換するための会を年２回ひらき、「会員や愛読者の寄書を以て婦人世界と云ふ雑誌を編集し其れを会員に配布し世間にも売り」、その利益を「憐れな人に施す」とある。つまり、婦人たちの意識向上のため交流をはかる一方、寄稿による雑誌を販売して得た利益で慈善を行うとの目的が示されている。同じく巻末の浪華婦人会規則によると、会員は１ヶ月会費10銭で雑誌を受け取り、愛読者は雑誌の定価８銭のみ払うとなっている。この「会費の余りを貧民に施す」とある。愛読者の投稿募集の際に、「如何なる有名な婦人学者にても、慈善的事業なれば原稿料は出さず」、「同志の人」であれば「貴賤の別なく入会を歓迎」する、とその平等的姿勢を謳っている。創刊時の会員は61名を数え、長沖花子をはじめ、荘保麻子、清水種子、明星派歌人増田雅子らの名前が見える。このうち、荘保麻子は、「金蘭会」（現大手前高等学校同窓会）の卒業者名簿によると、1897年に同校の前身である市立大阪高等女学校を卒業した女性であり、女学校の卒業年次から推察すると20代前半の若さであろう。清水種子という人物は、当時、婦人矯風会の大阪支部の書記であり、大正期には1000人以上をまとめる部会長を務めている。

そもそも、浪華婦人会編『婦人世界』の出発点はどのようなものであったのか。第50号（1905年７月15日）所載の「五拾号所感」によると、この会は、小沢円子・木本鉄子・荘保麻子・長沖花子が、裁縫・習字・美術・読書を貧家の女児のため愛染神社で教え始めたのが最初で、服部錦子・益田政子が加わり、自分たちの和歌・文章・小説などを集め一冊子にし、その読み代を１ヶ月10銭ずつたくわえ、慈善事業に寄付したところ、60名の賛成者が集まったという。その一冊子の誌名が「婦人世界」であることを考えると、会の活動の開始と雑誌の創刊はほぼ同時だったらしいことがわかる。創刊号で示された雑誌発行の利益で慈善事業を行うことは、この時点ですでに企図されていた。そして、この「慈善事業」と「雑誌発行」は、以後、浪華婦人会の事業の二本柱となる。

（2）創刊号および雑誌の概観

創刊号の奥付には、次のようにある。「編集兼発行人　大阪市西区南堀江上通１丁目38番邸長沖はな／編集及発行所　大阪市南区末吉橋通４丁目61番邸浪華婦人会／印刷人大阪市西区土佐堀裏町54番邸中西豊蔵／発売所　大阪市東区南本町心斎橋筋角金尾文淵堂書店」。創刊号は菊版24頁。表紙のデザインは河辺青蘭女史によるもので、白地に赤い文字で「婦人世界」と書かれている。表紙デザインは、第２号からはベージュ色地に葦草と雲隠れの月、第８号からは梅の木の枝に変わる。第26号では、浪の模様がデザインされ、「婦人世界」の字体が篆書体へと変わり、第32号では、ピンクの色地に海辺の松が描かれる。第48号では、女性が月桂冠を右手に持つ絵に変わり、これまでと異なる甘美でロマンティックな趣になる。第56号は、第１号と同じ朱色の「婦人世界」の文字が中央に印刷された簡素なものになるが、これは表紙の応募が間に合わなかったためで、翌月の第57号では、梅の花の髪飾りをつけた女性が梅の花の咲いた木の枝に手を伸ばして星を取ろうとし、右手には羽根ペンを持つしゃれたデザインに変わる。36号まで河辺青蘭と明記されていた表紙作成者名は48号以降は記載されなくなった。

頁数は、創刊号と日露開戦２か月後の第35号のみは30頁をきるが、だいたい40～50頁前後を保ち、第６号、第44号、第50号、第51号は50頁を超える。そして59号では40頁をきり、次第に頁数を減じて、第66号では30頁となる。

創刊号の目次は以下の通りである。

目次

表紙　河辺青蘭女史筆

論説

大阪時間　浪子

未婚の人の職分　安子

婦人の思想　一閑女

家庭の栞

○茶の話（家表流）　清隣

○来客の時注意すべき事　こせばゝ

○料理　若菜女史

○裁縫　柳栄女史

○結髪　菫花女

○化粧　八重鶴

小説

『婦人世界』第32号、第60号
（筆者蔵）

○鬼ヶ淵　千歳女史
○貧児の状態　憐愛女

○芳ちやん　錦子
○仕舞　安楽女史
○髪の流行　堀江花子
詩藻
○乳母の家　中西やす子
○郭公留客長歌　麻子
○外国だより　麻子

論説「大阪時間」では大阪人の時間のルーズさを指摘し、「婦人の思想」では美衣美食を節倹し慈善に施すべきといった意見を述べる。家庭の栞は、料理法や編物の指南、化粧法の伝授など。小説のうち、千歳女史の「鬼ケ淵」は継母とその娘と恋人との悲劇をテーマとするもの。憐愛女の「貧児の状態」は、小説というよりも、貧者の子の状況を読者に訴えかけるものである。また、「外国便り」として、（荘保）麻子が米国にいる友人から受け取った手紙を紹介している。「素人が」「家政の余暇に」為した編集ではあるが、「婦人の思想」「貧児の状態」といった記事には「慈善」奨励の主張がストレートに表われている。しかし、「慈善」の具体相は創刊号からはわからない。

３．日露戦争下の浪華婦人会の慈善事業

（１）総集会の議論と浪華家政塾

浪華婦人会の二大事業「慈善事業」と「雑誌発行」が活発化するのは日露戦争下においてである。戦時下で発行された『婦人世界』のうち、現存するものは、第34号（1904年３月）、第35号（同４月）、第36号（同５月）、第38号（同７月）、第44号（1905年１月）、第48号（同５月）、第50号（同７月）、第51号（同８月）の８冊である。戦争勃発１か月後の第34号には、協力一致勤労節倹や扶助恤兵を呼びかける記事が掲載されており、軍資金と国庫債券への出金が報告されている。第35号では、春季茶話会を中止すること、戦争協力費捻出のため雑誌の紙数を減ずることが提案された。しかしこれらの案件については各会員の意見を待つとされている。

戦前から一貫して慈善事業を主張していた荘保麻子は、この号で、金銭的余裕のないこの会は、軍人遺族救護のための寄付ではなく、遺族妻女に職業を与える事業をおこすべきだと述べる。また機関誌は女性のみの編集という意味あるものなので、廃止せずむしろ記

事を充実させて経費の余りを寄付へまわすようにしてはどうかと提言する。戦争という緊急時に、会の目的である慈善事業と雑誌発行とをどう結合させていくかは、総集会での会員の議論に委ねられた。

総集会は1904年４月24日清水町裁縫教習所で行われ、その内容が第36号にまとめて掲載されている。沖野筆子、大塚鋼子、小笠原松枝、清水種子、中川楢枝の辞任を受け、幹事より次の者が、臨時補欠役員として選ばれた。人事異動の詳細は不明だが、選出されたのは、古宇田節子、安藤しづ子、菅野（ママ）須賀子、吉田政枝子、中川千代子の５名であった。管野須賀子は、前年の1903年５月に内国博覧会浪花踊反対を訴えたことが矯風会の『婦人新報』で採りあげられ、同年６月に大阪婦人矯風会に入会、文書課長を務めるまでになっていた。清水種子は、浪華婦人会設立以来の会員であり、この時期、大阪婦人矯風会の書記としても、林歌子会頭をささえた。日露戦争勃発後の４月から５月にかけ、大阪婦人矯風会慰問使として、基地、予備病院や救護所など戦争関連施設を巡っている（清水たね子「陸海軍病院歴訪記」、『婦人新報』第85号）。推測するに、矯風会の仕事で多忙な清水種子に代わって、同じく矯風会会員である管野が代役を務めたのではないか。管野須賀子の名は『婦人世界』第54号（1905年11月15日）の会員名簿にも見える。ただし役員ではない。

この日の議題は、当分雑誌の紙数を減らして雑誌出版費用の幾分かを恤兵部に寄付すること、また出征軍人家族に対し慈善事業を行うことおよびその方法について問うものであった。会議では、〈浪華婦人会の生命ともいえる『婦人世界』を戦争だからといって消極的方向にもっていくのは不賛成。献金や国庫債券応募はすでにしており、他の婦人会と重複する行動はとるべきではない〉、〈家事育児を疎にせず、第二の国民を作ることも義務。外出できるものは軍人遺族慰問に出る〉、〈出征家族が業に就くために幼い児女を預かってはどうか〉といった意見が有力で、他の意見も、多くが、雑誌を縮小することには反対であり、むしろ有益な記事を増やすこと、その他の事業を展開する際にも『婦人世界』をその機関とすることを求めていた。

結局、慈善事業と雑誌発行という最初の目的は継続することとなる。出征家族や貧しい人に手芸の職を与える裁縫教授所を作ることは、すでに第35号の巻末に、裁縫教授所の趣意として、学資が無く篤志ある婦人のために無月謝で裁縫を教えるとの記事が載っていた。第38号では、女生徒募集の広告とその詳細が載る。これは種々の事情で学校に通えない人のために専門家による裁縫を教授する速成一年課程で、学資の無いものは無月謝とし、また目下の戦時対策として軍人遺族は無月謝のうえさらに製品の賃金を与えられるものとした。また、和洋料理会を設け料理実習をするとされてもいる。これらはのちの「浪華婦人会家政塾」に発展する。家政塾は、第60号（1907年４月15日）に石上露子（杉山た

か子）の卒業生に贈る言葉が掲載されているので、日露戦争後も続いていたと考えられる。

（2）日露戦争下での幼児保管所

もうひとつの慈善事業は、日露戦争下に設置された「幼児保管所」である。「婦人会」（のち「婦人界」）欄を設け、各婦人団体の動向を紹介した『婦女新聞』によれば、日露戦争勃発の２か月後には、東京では早くも、軍人家族授産婦人会が発足し、幼児保管所もできていたらしい。浪華婦人会の、出征軍人家族のための「幼児保管所」（保育所）も、この流れに沿うものであろう。『婦女新聞』（1904年11月21日「婦人界」欄）では、「浪華婦人会の美挙――大阪なる同会には会員三百余の小団体なれども皆熱心の人にて今般出征軍人幼児保管所を設けたる由」という記事が載っている。この幼児保管所は、難波鉄眼寺内の一堂を借り、朝６時に児童を収容し、幹事池原静子はじめ、大阪府立病院看護婦など10名、保母２名雑用係を雇うとある（第44号）。記事通りであれば、乳幼児を預かる保育所としては、かなりの充実ぶりである。第44号巻末には「出征軍人幼児保育所雑録」があり、保母小中ひろ子による「保育所日誌」が掲載されている。それによると、鉄眼寺内の保管所は、1904年11月10日から業務を開始したようだ[4)]。さらに、世話役の会員の動向や、保育所内での幼児の様子も具体的に描かれていて、臨場感あふれるものである。父親が出征し「お父さんのおみやげはロスキーの首と金の勲章」と屈託なく言う子や、昼飯を出せば「珍しげにしかも喜び喜び箸を採り上げぬ　此時の幼児の顔は崩れん計り」など、戦時下の状況が見て取れる。「例のおきみちやん　いと無造作なるふるまいばかり」、会員より歳暮の寄贈品を与えた折にも、「おきみちやん大よろこびにて母親と共に幾度となく礼を述べて帰りました」と記される「おきみちゃん」は、石上露子が第43号（1904年12月15日）で発表した作品「おきみちやん」に登場する女の子である。

第44号以降の「保管所雑記」では、毎日の出席幼児の人数も示され、月にすると、1904年11月延べ人数163名、12月400名、1905年６月369名、７月402名、10月372名、12月278名、1906年２月保管所最後の月には167名となる。この幼児保管所については、第58号（1906年３月15日）に「二月末で保管所を解散」という記事が掲載されており、翌月第59号には「保管所解散報告」が彙報欄に掲載されている。「難波鉄眼寺内軍人幼児保管所も、此度戦争の終局と共に、市役所よりの注告もあり、他の保管所も解散する事に致しました」とある。荘保麻子が提唱した本来は貧民のための幼児保育所の趣旨が、戦争と同時に、軍人家族のための保育所になったがゆえのこの時期の解散である。この記事からは、保育児らへの惜別の念と一定の役割を果たした満足感が伝わってくる。

４．日露戦争と『婦人世界』

新発見の第44号（1905年１月15日）は静岡県立大と石川武美記念図書館に所蔵されているが、この号は、日露戦争下の発行号のなかでも、見るべきものが多い。まずは目次を掲げておく。

目次

○表紙画　西成廣月君
○秋季茶話会写真
○新年の辞
○三十八年の新としを迎ふるよろこび　はちす
　◎家庭
○育児注意　柳瀬實次郎君
○主婦の研究　市桃花
　◎友信欄
○数件
　◎漫録
○大阪瞥見　明法学士
○英吉利王ジョン　鶯林訳
○松葉掻　加藤千歳
○陣中たより
○新年山の唄
　◎小説
○霜夜　露子
○苦の一夜　はちす
　◎詞藻
○長歌。和歌。今様。俳句。文章。
　◎雑録
○会告　数件
　◎出征軍人幼児保育所雑記
○数件

1904年11月19日に鉄眼寺で行われた秋季茶話会の写真の一部（静岡県立大学・石川武美記念図書館蔵　第44号の口絵写真）。最後列右から６番目石上露子、10番目マスクの男性が宇田川文海、露子の向かって斜め右下は管野須賀子。

新年号ゆえ、表紙画は河辺女史にかわって西成廣月が梅の木に銀色の大きな月がかかる

絵を特別に提供したらしい。また秋季茶話会写真とあるのは、前年1904年11月19日に幼児保管所のある鉄眼寺境内で撮影された集合写真である。そこには、石上露子、管野須賀子、賛成会員宇田川文海の姿も見える。また、保育所内の乳幼児20名が、会員に抱かれたり、座ったり、直立不動の姿勢で神妙な顔つきをしたりして写っている。

この号では、旅順が陥落した祝いと新年の賀が重なった喜び、戦地の同胞の血と肉であがなった戦争であることへの自覚を促す言葉が述べられる。しかし、開戦後間もなくの第36号や第38号に見られる戦争関連歌や、軍人の実戦譚の講演案内などは影をひそめ、陣中の兵士からの礼状を掲載するにとどまる。日露戦争下の雑誌全体をみても戦争色はみられない。特に好戦的でもなかった『婦女新聞』は、戦意発揚よりは、婦女に向けて、後顧の憂いなからしむるように努めること、女性の本分を生かして軍人家族を慰撫することを訴える言説が中心であった。しかし『婦人世界』第44号以降では、そのような言説すらみられない。理念よりは、家政塾や幼児保管所といった実質的な活動に基本がおかれていたせいか、雑誌の内容は、むしろ戦争から遠く離れている。創刊時の、「家庭・衛生・育児・文学について研究、知識を交換」という本来の目的に即して編集されているようだ。この時期の編集に関しては、編集主任に日下徳子、加藤正子、編集委員には、神戸の穎川智加子、東京の浜節子、女子大学校の石原幸子、河内の杉山孝子（石上露子）が挙がっている。日下徳子は金尾文淵堂の後を受けて発売所となった日下書店の人物である。大阪発行の雑誌なので、当然、露子が編集の中心にならざるを得なかったであろう。

石上露子は、編集の一方、執筆をも手掛けることによって、自らの文学観や思索の痕跡を残している。ただ、本稿は露子の文学や思想について述べることを意図していないので、ここでは小説「霜夜」を簡単に紹介するにとどめておく。

上記の第44号には、新しく見つかった露子の小説「霜夜」が掲載されている。教師仲間の女性の口をかりて、貧しい村の子どもが背負わされている運命の悲惨さを訴えたものである。富めるものたちは、さかんに戦争参加を鼓舞する一方で、貧農の苛酷な状況を見て見ぬふりをする。若い女性教師に、「社会主義の歌」を歌わせることで、戦争に駆り出され、あるいは送り出さざるを得ない従順なひとたちをないがしろにする悪魔のような力――国家権力といえよう――を描き出す。露子は、富者の側にいながらも、貧富の差や社会の矛盾に敏感であった。

5．おわりに――『婦人世界』を通して見えてくるもの

『婦女新聞』の浪華婦人会閉会の記事に、「明治34年創立以来雑誌『婦人世界』を発行し、家政塾及幼児保育所等を設け孜々世の為に努力し来りし浪華婦人会」（1907年12月20日「婦人界」欄）とある。浪華婦人会の注目すべき点は、慈善事業と雑誌発行との両立をめざし

たことにある。もちろん慈善事業そのものは、浪華婦人会に限ったものではない。浪華婦人会の女性たちも、他の明治期の女性たち同様「慈善事業」を回路として、私的領域の「家」から公的領域の「社会」へ参入していったといえよう。その「慈善観」は、たとえば『婦女新聞』の「鉱毒問題と婦人」（1901年12月２日社説）において、国家問題である鉱毒問題の半面の慈善問題を、情も涙もある婦人は看過すべきでない、と述べられているところに見られるような慈善観と同様のものである。『婦人世界』においても、さな江子なる人物が、進んで政府に鉱毒調査をせよとせまるのは男子の仕事であるとしても、鉱毒問題で飢餓にせまっている窮民を救うことは本会の標榜する慈善の業であるゆえ、鉱毒問題に目を開けと主張している（1902年２月第９号および８月第15号）。戦争時には、情の人である婦人が軍人や軍人家族への慈善事業に向かうのは当然の帰結であった。浪華婦人会の戦時下での慈善活動もまた、女性の公的役割を作り出す回路となったことは否めない。しかし、他地域に比べ民間による慈善事業が盛んであった大阪の地域性も無視できない。慈善団体は、1902年時点で、20以上組織されていた[5)]。翌年には、日本初の慈善事業関係者の全国集会が、東京ではなく、大阪中之島公会堂で行われている。商工業発展に伴う流入人口の増加、その結果による貧民の増大への対策としての「慈善」は、言葉だけのものではなく、身近で具体的な喫緊の問題として浪華婦人会の会員たちにも認識されていたと思われる。

ところで、『婦女新聞』は、婦人会設置をうながし慈善事業を奨励する一方で、機関雑誌発行をも勧めている（1900年11月17日６面記事）。愛国婦人会や婦人矯風会以外の婦人会がどの程度その勧めに従ったかは明確でないが、浪華婦人会はその機関紙発行をもうひとつの事業とした。慈善事業を支える経済的基盤を得るための雑誌発行ではあったが、戦時下であっても、いや戦時下であるがゆえに、慈善行為とともに、雑誌発行をともかくも続けよう、という姿勢が見られることは、本稿中で見た通りである。浪華婦人会の目的は、一貫して「慈善」にあった。雑誌発行も、それを目的とすればこそ、充実したものにしなければならない、との認識で会員は一致していた。日露戦争下では、文芸欄をカットし、雑誌の頁数を減じることで出版費用の一部を恤兵部へ寄付しようとの提案があったが、そうはならず、むしろ1904年から1905年末にかけて、頁数が増加している。しかもその内容は、軍人や軍人家族を慰撫することをうったえる言説ではなく、あくまでも当初の「家庭」「文学」知識の向上をはかるという方針に沿うものであった。戦争中から登場した読者投書欄「友信欄」は、雑誌編集者露子が主宰し、読者間の交流をはかったものである。「文学上の勉強」を志向した露子を中心に、戦時下にもかかわらず、「文芸」を前面に押し出そうとする姿勢がみられた。この欄では新聞小説の批評が読者間で交わされている。公的な慈善事業とともに、戦時下での私的世界の充実を図ろうとする雑誌の発行は、浪華

婦人会および『婦人世界』の戦争への対応の仕方を物語るものであろう。くり返し主張される「婦人だけの編集になる雑誌」との言い方には、雑誌発行もまた、慈善事業には還元されない社会活動であるとの自負がうかがえる。

そして、この雑誌は、女性にとって当時唯一の社会参加の手段であったと言ってよい慈善事業の意味をも相対化する結果をもたらした。石上露子は、1906年、自ら東北三県凶作義捐の慈善音楽会を主宰しているが（第58号、第59号）、「慈善事業」そのものについて、鋭い指摘をしている。1907年１月15日第68号の「あきらめ主義」において、「一たいまあ慈善と云ふものはどうしたところから出来て参つたものだとお思ひ遊ばします。薄幸な工女や工夫や、さてはいじらしい貧民の子弟等が見る目も苦しき労働より生じた幾多の血しほの、黄金と化して再びをまた、彼等が上に帰りゆくのに他ならない。取つたものをこゝに返す、何のそれが誇るに足るべき事で御座いませう、慈善事業の気高さのなんのと、何がさまでに讃嘆に価いたしませうぞ」と綴っているのである[6]。当時の社会主義者らと同様に、社会問題としての貧困という視点にたった見解である。『婦人世界』の読者に向けて書かれたものであるが、広い見地から、自らも属していた愛国婦人会や、当時盛んであった皇族や貴顕を押し戴く婦人団体の慈善の中身の無さを追及するものであったと思われる。彼女の意見は、まさに当時の「慈善事業」の本質をつくものであった。

この雑誌発行と慈善という車の両輪のような事業は、結果的には、戦争によって活発化した。日露戦争下の1905年７月の会員数は400～500名と最高を記録した。しかしながら、日露戦争が終結すると、翌年軍人幼児保管所は解散する。「軍人家族幼児保管所」の「軍人」を除いて貧困な労働者の児童を預かるようにしてはという意見もあったものの、そうはならず、保管所は閉鎖された。雑誌発行も戦後２年ほどしか続かなかった。この二大事業は戦争への緊張感・緊迫感に支えられたものであったために、戦争の終結は、結果的に浪華婦人会の終息を助長した。

戦争を乗り越えて婦人会が生き残り、雑誌発行を継続させるには、バックボーンとなる人物もしくは思想が必要であったかもしれない。露子が雑誌編集に携わったとはいえ、機関誌『婦人世界』全体としてある特定の思想や信条に基づいた編集がなされたわけではなかった。しかし、ここまで見てきたような平等性・民主性・多様性こそが「浪華婦人会」・『婦人世界』の真骨頂ではなかったか。一時は会長もおかれたものの、会長の不要が論じられ、会長なしの幹事のみによる運営がなされた。浪華婦人会は、富裕な女性たちの会ではあったが、皇族や華族を頂点にいただく東京中心の婦人会組織とは異なり、全員参加型の民主的な婦人会組織であった。積極的に慈善事業に取り組んだ荘保麻子や、文芸をものしながら社会主義に親近性をもった露子、わずかな接点のみではあったが管野須賀子などの複眼的視点をもちつつ、『婦人世界』は浪華婦人会と共に誕生し、そして終焉を迎えた。

浪華婦人会の社会活動は、慈善事業とそれを支える雑誌発刊に尽きるが、その二つを往還することで、重層的なものとなった。キリスト教や仏教という宗教的背景もないなか、「慈善事業」と「雑誌発行」の統合を常に念頭に置きつつ、経費に苦慮しながら婦人会運営にあたった彼女ら会員たちの意思とエネルギーは、明治期の大阪に結実した。今後、その詳細な検討が課題となろう。

注

1）『原敬関係文書』第８巻・第９巻（日本放送出版協会、1987年）には、原敬の第一次内務大臣期の新聞・雑誌関係書類が収められており、1906～07年当時に発行されていた雑誌についての官憲側からの記録がある。それを見ると『婦女新聞』『女学世界』『婦人新報』は記載されているが、浪華婦人会編『婦人世界』は見あたらない。同時代において、官民いずれにおいても認知度は高くなかったと思われる。

2）終刊の明確な時期は不明だが、『婦女新聞』1907年12月20日に「浪華婦人会の閉会」の記事があり、そのころには終刊をむかえていたと思われる。

3）第15号（1902年８月15日）で、大阪毎日新聞神戸支局の橋本生が、雑誌の価値としては他の立派な先生の執筆のそれとは比較すらできないものの、当誌のように婦人の手になる物はほとんどなく、例外的であると評価している。

4）難波元町にあった鉄眼寺（瑞龍寺）は難民救済に尽力した鉄眼禅師にちなむ寺であり、浪速区元町に現在もあるが、戦災を受け当時の面影はない。1904年当時浪華婦人会の事務所末吉橋通四丁目は、今の四ツ橋交差点の東あたりかと思われ、鉄眼寺は、そこから直線距離にして約1250メートルくらい南にあった。

5）西本良子・村岡潔「仏教と福祉――明治・大正期大阪における慈善事業の信仰的展開」（佛教大学総合研究所紀要15号　2008年）。1887年、緒方洪庵の息惟準ら大阪の医師が大阪府立病院を貧民救済の病院とするよう請願するが府知事に却下され、その翌年、大阪慈恵病院を設立する。この民間病院は実業界からの支援を受け、貧困患者および災害のため負傷したものの治療にあたった。行政側の医療保護が限定的であったのに比べ、幅広く患者の施療にあたった（中山沃『緒方惟準伝――緒方家の人々とその周辺』2012年思文閣出版）。緒方家の女性たちは、大阪婦人矯風会ともつながりを持った。浪華婦人会との関係は特に見いだせないが、後に大阪慈恵病院医学校校長を務めた緒方正清は『助産の栞』を発行し、石上露子はそこにも寄稿している。二人は昵懇の間柄でもあった。

6）第68号のこの記事は、松村緑の「石上露子遺文」（東京女子大学『比較文化』第10号1964年２月）による。松村は露子作品に関して第71号（1907年４月15日）まで紹介しているが、雑誌自体は、71号、68号、第３節でふれた43号とも、現時点では未見である。

（かじの　まさこ）